

本條秀太郎 端唄（江戸を聞く） 「フェリーチェ・ベアトの見た江戸のうた」



秋深し、10月22日（日）紀尾井小ホールで本條秀太郎の会「端唄」〜江戸を聞く〜が開かれた。衆議院選挙の当日迷走する世相と、台風のあわたたしい一日だったが、紀尾井ホールに入ってひと息、端唄を聞いて更にひと息、穏やかひとときを味わった。

第一部、「秋深し」「薄墨」「たてやま節」「二上がり新内」など十曲を続けて演唱。歌詞の中には「あの山越えて逢いにゆく」など、端唄の世界の広いことを感じた。

第二部、「フェリーチェ・ベアトの見た江戸のうた」秀五郎、秀慈郎が左右に座し、リズムカルな三味線の音にのせて本條がうたうベアトの見た江戸のうた。「洋行はやりもの」「お江戸日本橋」「お角力さん」「いつも吉原」「花魁三分二厘」…など16曲を謡う。ベアトは1863年ごろ日本にきて精力的に撮影していた写真家。そのベアトさんが見た江戸を、吉原を、浅草を写真に写し、その上に色彩をのせた美しい「写真絵」を紹介しながら曲が進んでゆく。横浜ことばを調べる面白「かつぽれ」は「カップル」からきた、などうたの会間の話も興味深い。その昔、ベアトさんが見た江戸が端唄に残っているなんて驚きでした。